【修士論文研究ノート】

題目；メルロ＝ポンティにおける相互主観性論の問題点

井川　義次

序
第一章　生活世界
　第一節　完全な還元の不可能性
　第二節　前意識的志向性
　第二節　生きられる身体
第二章　世界への存在としての身体
　第一節　世界への住み込み
　第二節　運動的意味の獲得
　第三節　幼児における癒合的社会性
第三章　相互主観性
　第一節　肉の存在論
　第二節　主な論者の相互主観性論
　結語

本論文では、モーリス＝メルロー＝ポンティの哲学において主要な役割をなす「相互 主観性問題」を取り上げ、その他の論者に異なる優越性を論じ、同時にその限界を指摘し、他にあり得たであろう説明の可能性を討求した。

まず第一章においては、両義的身体がそこに住み込む生活世界について論じた。即ちこの知覚世界を前提にして論を展開するところにメルローポンティの著しい特徴があるからである。

彼の先行思想家であフッサールは徹底した省察の末、明証的意識の成立にとっては、自然的意識に現れる世界や身体・他者の存在が論じられなければならないことに想到した。メルロ＝ポンティは彼の思想形成の当初から哲学的考察をこの後期フッサールの到達点より始めていた。

メルロ＝ポンティにとって世界性は主体にとっては切り離しの不可能な住み込みの場であった。ここにあっては主体も客体も、ゲシュタルト図形の地と図とが、時に応じて反転するように、その間に明確な分割線を引くことはできず、むしろ密接に絡まり合っている。すなわちこの世界は「身体－主体」にとっては知覚的な意味の領域なのである。意味の生成はこのような世界における身体の知覚に始まるが、それは必然的に両義性を含むことになる。そしてこれこそが相互主観性成立の要件であることを指摘した。

第二章では身体が単に世界に内在してとどまるのではなく、世界へと存在しているというメルロ＝ポンティのハイデッガー解釈をもととして、意味の生成が運動的に起こることを論じた。

メルロ＝ポンティはフランス語の（sens）の語の含意の多義性に着目した。この語に「意味」の他に「方向」・「感覚能力」・「織り目」等の含義があるところから、意味というものが、世界へ向かって存在する感覚能力としての身体が他者と連動するその場に生じるものであることを説く。本稿ではフランス語のサンスがこのように多義的であるのは、本来語源がラテン語系とゲルマン語系それぞれ別々のものであったのに、形態的に似通ったものであったため合流したのたであることを指摘した。

自己にせよ他者にせよ、知覚的世界へと方向をとる身体的存在としては共通である。そしてこの身体的存在は行為を通じて他者と連関して意味を獲得する。連関のなかで世界や他者、そして自己の意識が相即して形作られる。この連関のなかでは本来「自一他」「内一外」を峻別することは不可能である。以上の立論を、彼の言語論、幼児の行為的な意味の獲得の論説にたどった。

第三章においては、メルロ＝ポンティ後期思想について考察したが、ここにおいては行為的な連動・連関を重視した「相互身体性」の地歩にまで進んでいた。さらに最晩年に彼は「肉の存在論」、を論ずるにいたったが、これは初期の「ひと」がより徹底されて存在論的に深められたものである。「相互主観性」成立の根拠はここにいたって最も整合的に説明されうるのであるが、後期思想がより存在論へと傾き、また、神秘的表現を多用したことを指摘した。

メルロ＝ポンティは、決定的に絶対者のごとき存在を拒絶していたはずであった。諸々の意味の生成の場ときり離して、あらためて「ひと」ないしは肉の存在のような根源者をもちだすことは不可能なことである。優位はあくまで諸存在者、すなわち存在の意味にこそある。すなわち相互主観性を含む諸々の意味の生成の他の場所に、別に存在を論ずることは出来ないとする、メルロポンティの思想は徹底されるべきだと考えるのである。

ついでメルロ＝ポンティの相互主観性論に直接・間接的に関わる論者の相互主観性論を通覧し、彼の独自性を示した。意識による後世に重点を置く各論者とは対照的にメルロ＝ポンティは知覚的世界を重視する。

最後に、「ひと」、「肉」、「神」等の語によって形容される「存在」すなわち大文字の（Être）はたとえ比喩であっても、名詞化し、主語化してはならず、本来の動詞的性格を忘れるべきではないことを指摘した。しかも、メルローポンティの思想に鑑みて、自動詞でも他動詞でもない、受動でも能動でもない、古代印欧語の中間態動詞が言語的モデルとして考えられるのではないかということに言及した。こうして現象の場としての世界の存在を神秘化することなしに、むしろ操作概念として学的に保持することが可能ではなかったかということを探索した。

（いがわ よしつぐ　筑波大学 哲学・思想研究科在学）